L3T/L3TK/L3TF

本科０期１月度

解答

Ｚ会東大進学教室

難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

1章

【問題】（演習）

出典…『大鏡』　／　オリジナル問題

現代語訳

この大納言殿〔＝藤原行成〕は、諸芸ことごとく備わっていらっしゃったが、和歌の方面で少し劣りなさっていたのだろうか。殿上の間で歌論議をしようということになって、歌の道の〔＝歌道に携る〕人々が、どのように問答したらよいかなどと、歌の学問よりほかの〔＝歌の学問以外の〕ことは（論議し）ない（のである）が、この大納言殿は、（その時）なにもおっしゃらなかったので、どうしたことかと思って、何某の殿が、「難波津に咲くやこの花冬ごもり、（この歌は）どうですか」と申し上げなさったところ、しばらくなにもおっしゃらないで、たいそう考えこんでいらっしゃる様子で振る舞って〔＝考えこんでいらっしゃるそぶりで〕、「わかりません」と答えなさったので、人々は笑って、興が醒めてしまいました。

（しかし、人が）ちょっと思いつかないことにも、御思慮が深くはたらきなさって、機転をきかせて〔＝才たけて〕おやりになった御性格で、帝がご幼少でいらっしゃった時、人々に、「玩具をもってまいれ」とおっしゃられたので、（人々が）いろいろ、金・銀などで工夫を凝らして、どんなものがお気に召すかなあと、趣向をこらした物をこしらえて、持ち合い参上したが、この殿〔＝行成〕は、独楽に村濃の紐を添えて差し上げなさったところ、「不思議なかっこうをした物だ。これはなにか」と（帝が）お尋ねになったので、（行成は）「これこれの物でございます」と申し上げて、「回して御覧なさいませ。おもしろい物でございます」と申し上げなさったところ、（帝は）南殿〔＝紫宸殿（ししんでん）〕にお出ましになられて、（その独楽を）回しなさると、たいそう広い御殿の中で、（独楽は）隅々までくるくる回るので、（帝は）たいそうおもしろがりなさって、これだけを、いつも御覧になって遊びなさるので、他の物〔＝独楽以外の玩具〕はしまいこまれてしまった。

解答

問1　1＝(エ)　3＝(イ)　4＝(ア)

問2　(大納言殿は)しばらくなにもおっしゃらないで、

問3　A＝(ウ)　B＝(イ)

問4　こまつぶり〔8行目〕

問5　異

【問題】（自習）

出典…紀貫之『土佐日記』「承平五（九三五）年一月二十日」の全文　／　明治大学　政治経済学部

現代語訳

二十日。昨日のよう（な悪天候）なので、船を出さない。（船が出ないので）一行の人々はみな心配して嘆いている。（帰京が滞っているのは）つらくじれったいので、ひたすら、日が経った数を、「今日で何日（になった）」「二十日（経った）」「三十日（経った）」と（指折り）数え（てばかりい）るので、指もきっと傷んでしまうに違いない〔＝あまりにも指折り数えすぎて、指の方が駄目になってしまうに違いない〕。とてもつらい。夜も寝るに寝られない。（いつの間にか、夜遅くにのぼる）二十日の夜の月が出ていた。（都とは違って、ここは海辺なので）山の端も（見え）なくて、（月は）海の中から（いきなり）出て来る。このような（風景）を見て（のこと）か、昔、阿倍仲麻呂と言った人は、（遣唐使として）大陸に渡って、帰って来（ようとし）たときに、船に乗ることになっていた場所で、あちらの国の人が、餞別の宴会を開き、別れを惜しんで、あちらの（国の歌である）漢詩を作ることなどをしたとかいうことだ。（それでもまだ）満足し（て名残が尽きることが）なかったのだろうか、二十日の夜の月が出てくる（ほど夜も遅いころ）まで（一緒に）いたとかいうことである。その日は、（月が）海から昇ったそうである。これを見て、阿倍仲麻呂さまは、「我が国では、このような歌を、神代（の昔）から神さまもお詠みになりますし、今（の世の中で）は上中下の（あらゆる身分の）人も、このように別れを惜しんだり、喜ばしいことがあったり、悲しいことがあったりする際には、（歌を）詠む（のです）」と言って、詠んでいたとかいう歌（は、次のようなものだった）、

青海ばら……真っ青で広々とした大海を（故国のほうへ）振り返って遙か遠くまで見渡していると、（海から昇った月が見えるよ、

あの月は、自分の故国である日本の）春日にある三笠の山に出ていた（あの）月（と同じ月であるの）だなあ

と読んだとかいうことだ。あちらの国の人は（日本語を知らないから、和歌を）聞いても判るはずがなかろうと、思われたが、（その和歌の）言葉の意味を、漢字で趣旨を書き示して、こちらの言葉を伝えてある（日本語が通じる）人に、（その歌の細かな意味を）言って判らせたところ、（その）真意を聞き取ったのだろうか、（あちらの人々も）たいそう予想外に賛美したとか言うことだ。大陸とこの（日本の）国とでは、言葉は違っているものだが、月の光は同じものであるはずなので、（それと同じように）人の心というものも同じ

ものであるのだろうか。そこで、今、その昔を思いやって（、阿倍仲麻呂に思いを寄せて、それにちなんで）、ある方〔＝紀貫之自身のこと〕が詠んだ歌（は、次のようなものだった）

みやこにて……（この月は、かつて土佐の国に赴任する前に）都で山の端に（昇っているのを）見た月（と同じ）ではあるが、（その月は山の端から昇っていたのに、この地の月は）波（間）から昇って、波（間）に沈むのですよ〔＝空の月は都の月とは変わらないけれども、ここは、自分の故郷の京ではないのだと、つくづくと思い知らされますよ〕

解答

問1　3

問2　(a)＝指　(b)＝言

問3　4

問4　ア＝2　イ＝4　ウ＝3

問5　2

問6　1

解説

問1　場面分割の問題。場面分割は物語の考え方を応用し、「時間・場所・人物」の三点に着目。まず判りやすい「時間・場所」に着目する。3～4行目に「昔、……唐土に渡りて～」と時間と場所を示す用語が見える。これに注目すれば、この「昔」に対応をしている12～13行目の「さて、今、そのかみを思ひやり～」が見つかる。この部分で話を「昔の唐土」から元に引き戻している。よっ

て、この文章は「二十日～出で来る。／かうやうなる～ことにやあらむ。／さて、今、～波にこそ入れ」と三分割できるわけだ。従って、「かうやうなる～同じことにやあらむ。」を切り出している選択肢3が正解。

この第二段落を見ると「かうやうなるを見てや～ことにやあらむ。」という疑問で開始部分と終了部分を括っている上に、最後が「にや」の末尾を持っていることから、この第二段落全体は一種の『挿入句』を形成していると考えられよう。

問2　基本的な古語知識。ただし、文脈把握によって推測も可能な問題。傍線部(a)は「日の経ぬる数を～数ふ」に着眼。「日を数える」ことを今でも「指折り数えて」ということを考えれば、「ゆび――および」の音韻の類似性に気付くだろう。「指を折る」→「損はれぬ」というつながりも見える。これらから「および」＝「指」と導ける。この部分の訳と内容については、現代語訳を参照のこと。

傍線部(b)は「ことの心を→いひ知らせければ」の係り受けをおさえる。これに対して「男文字に様を書き出だして」とあることや傍線部直前の「かの国人聞き知るまじく、思ほえたけれども」と逆接があり、この「聞き知るまじ」が「いひ知らせけれ」と対応している点から、話題は「青海ばら～月かも」の和歌であると判断される。そうすると、伝える「心」は「歌の心」と判る。ちなみに表現について「心」を使った場合、それは「意味内容」という意になる。すなわち、「歌の心」は「歌の意味」で、「話の心」は「話の意味」。ここで「ことの心」が「歌の心」とつかめれば、「こと」＝「歌」となるので、この「こと」は「言葉」と判り、「言葉」を一語の漢字で示すと「言」になる。古文で「こと」に漢字をあてる場合、ほとんどは「異・言・殊」のどれかである。「事」は多く形式名詞であり、古文では形式名詞は省略されやすいので、「事」をあてるべき場合は少ない。

問3　基礎文法の問題。基本中の基本。「ぞ・なむ・や・か・こそ」に注目し、その文節の係り受けを見て、『文末』が「連体形・已然形」である箇所を探すこと。なお、問題では「係り結び」を問うているので、「結びの流れ」や「結びの省略」は除外されることに要注意。よって、「海の中よりぞ出で来る」「かうやうなるを見てや～などしける」「飽かずやありけむ」「月出づるまでぞありける」「海よりぞ出でける」「かかる歌をなむ、～よむ」「とぞよめりける」「心をや～たりけむ」「いと思ひの外になむ賞でける」「同じことにやあらむ」の十箇所。6行目の「これを見てぞ」は、意味上は傍線部**ウ**の「よめりける」に係るが、ここが連体修飾語となっているので、「結びの流れ」となって数には入らない。

問4　基礎文法の問題。基本中の基本。大学の入試とは思えないほど易しい問題だが、なめてかかると落とし穴にはまる。傍線部**ア**は「心もとなし」が一単語なので、「心もとなけれ／ば」で二語。傍線部**イ**は「損は／れ／ぬ／べし」で四語になる。ちなみに、「れ」は《受身》で「ぬ／べし」は《確述／当然》だ。傍線部**ウ**は「よめ／り／ける」の三語。この「り」は《存続》である。

問5　古典教養の知識問題。この『故事』か、出てくる『和歌』を知らなければ、どうにもならない。ここに挙げられた和歌「青海ばら～」の歌で主人公が確定できる。この故事は、遣唐使として中国に渡り、いざ帰朝という段になって、何度も船が難破して、ついに帰国を諦めて以後死ぬまで唐の皇帝に仕えた人の話。この人は、特に李白との親交が厚かったことも有名。その人は「阿倍仲麻呂」である。

問6　文学史の問題。設問文の「九三五年」、つまり一〇世紀が大きなヒント。また、冒頭の日付から「日記」作品と考えられる。この時期（平安の初～中期頃）の作品で、「日記」と言ったら『土佐日記』しかない。ちなみに、選択肢2・3の作品は『蜻蛉→更級』の順に成立。これは共に十～十一世紀の作品で、『更級』の作者（菅原孝標女）の伯母が『蜻蛉』の作者（藤原道綱母）である。また選択肢4・5は共に鎌倉時代の作。『東関紀行』が一二四〇年代に成立。作者は不明。『十六夜』は「阿仏尼」の作で一二八〇年代の成立である。

2章

【問題】（演習）

出典…清少納言『枕草子』「第一〇六段　二月つごもりごろに」の全文より　／　立教大学　文A　95年

現代語訳

（陰暦）二月の月末ごろに、風がたいそう（強く）吹いて空がひどく暗いうえに、雪が少しちらついているころに、黒戸〔＝清涼殿の北側、滝口の西にあった部屋〕に主殿司がきて、「ごめんください」と言うので、（私が）近寄っていくと、「これは、公任の宰相さまからの（お手紙です）」と言っているので、見ると、懐紙に、

少し春めいた気持ちがすることだ

と書いてあるのは、本当に今日の空模様にたいそうよく合っているものの、これの上の句はどのようにつけたらよいのだろうか、と思い悩んでしまった。「（公任さまのおいでになるお部屋にいらっしゃるのは）どんな方々ですか」と尋ねると、あの方この方、と（使いの主殿司が答えて）言う。みなこちらの気が引けるぐらい立派な（方たちだが、その）中でも、（特に歌学や芸道に優れた才能をお持ちの）宰相さまへの御返事を、どうしていい加減に口に出せようか（いや、気やすくめったな返事は返せない）、と思って、自分一人の心の中で悩ましいので、定子中宮さまにお目にかけ（て御相談し）ようと思ったけれど、一条天皇さまがおいであそばして、寝（やす）んでおいであそばす（ので、お見せすることもできない）。主殿司は、「早く（返事を）早く（返事を）」と言う。（もともと素晴らしい歌が作れる自信もないのに、さらに）本当に遅くまでなるとしたら、まったく取り柄がないので、どうにでもなれ、と思って、

空が寒いので花に見間違えるようにして降る雪に

と、（私は不安に）震えるような気持ちで（主殿司に）書き与えて（公任さまのところへ届けさせたが）、（私の歌を公任さまは）どのように思っているのだろうか、と（思うと）心細い。（私は）こ（の自分の付け句の評判）のことを聞きたいものだ、と思うのだが、悪く言われているのなら聞くまい、と思っていたところ、「俊賢の宰相などは、『やはり、（清少納言を）内侍に、帝に御進言申し上げ

て取り立てよう』と御評定になりました」というほどに（褒めてくださったと）、（今の）左兵衛の督で、（当時は）中将でいらっしゃった方〔＝藤原実成〕が、（私に）お話になりました。

解答

問1 (a)＝りっぱな〔4字〕　(b)＝返事〔2字〕　(c)＝自分ひとりの心の中で〔10字〕
(d)＝寝ていらっしゃる〔8字〕／やすんでいらっしゃる〔10字〕　(e)＝心細い〔3字〕
＊以上は、すべて解答例

問2 2

問3 (ア)＝歌の上の句〔5字〕
(イ)＝どのようにつけたらよいだろうか〔15字・解答例〕

問4 2

問5 (ア)＝6　(イ)＝5

問6 (ア)＝なほ、内侍に、奏してなさむ〔10行目〕
(イ)＝公任の下の句の典拠となった漢詩をふまえて、当意即妙に上の句をつけて返した部分。〔39字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…『大鏡』第二巻「太政大臣頼忠」／大正大学・他

現代語訳

ある年、入道殿（藤原道長）が、大井河で船遊びを催しあそばした時に、漢詩の船、音楽の船、和歌の船、と（三つに）お分けあそばして、それぞれの道に優れている人々をお乗せあそばしたが、この大納言殿（藤原公任）がご参上になったので、入道殿は、「あの大納言は、どの船に乗りなさるのだろうか」とおっしゃったところ、（大納言殿は）「和歌の船に乗りましょう」とおっしゃって、（和歌の船にお乗りになって次の歌を）お詠みになったのですよ。

をぐら山……小倉山から吹きおろす山風が寒いので、紅葉の錦を着ない人はいない〔＝紅葉の葉が人々の着物に散りかかり、誰もがみな、錦の着物を着ているように見えることだ〕

（大納言殿が、みずから）お願い申し上げ（て和歌の船にお乗り）になっただけのことはあって、（見事な和歌を）お詠みになったものですな。（大納言殿は）ご自分からも、（人に）おっしゃったとか聞きますことには、「漢詩の船に乗ればよかったなあ。そして、この和歌ぐらいの（すばらしい）漢詩を作ったならば、名声が上がるようなこともきっと（今より）勝っていただろうに。残念なことをしたものだな。それにしても、（入道）殿が『どの船に（乗ろう）と思うのか』とおっしゃったのには、我ながら得意にならずにはいられなかった」とおっしゃったそうです。一つの方面に優れていることでさえまれであるのに、ましてこのようにどの道にも抜きん出ていらっしゃったというようなことは、昔にもないことでございます。

解答

問1 (1)＝船遊びを催しあそばした

(2)＝あの大納言は、どの船にお乗りになるのだろうか

問2 ①＝(イ)　②＝(ウ)

問3 (a)＝謙譲語　(b)＝尊敬語　(c)＝謙譲語　(d)＝丁寧語

問4 和歌を上手にお詠みになった。〔解答例〕

問5 (ア)

問6 **初め**＝ひと事のすぐる　**終わり**＝侍らぬ事なり。（7～8行目）

問7 三舟の才・三船の才

解説

問1 現代語訳の問題。まずは品詞分解をしながら、一語一語の意味を考えていく。

(1)について。「逍遙せ」は、「気の向くままにあちこちと歩きまわること、そぞろ歩き、散歩」という意味の名詞「逍遙」に、サ行変格活用の動詞「す」が接続した、複合動詞「逍遙す」の未然形。ここでは場所が「大井河」なので、「逍遙す」は「船遊びをする」、あるいは「船遊びを催す」と解釈できる。「させ」は尊敬の助動詞「さす」の連用形、「給ひ」は尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形で、主語が「入道殿」であるところから、二重尊敬になっている。「～あそばす」と、二重尊敬を示す訳を考えよう。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。「～た」と訳す。

(2)について。「かの」は遠称の指示代名詞「か」に、連体格を示す格助詞「の」が付いたもので、「あの」という意味。「いづれ」は不定の事物を指す指示代名詞。ここでは「いづれの舟」で「どの船」という意味になる。「か」は疑問を表す係助詞。「乗らるべき」は動詞「乗る」（ラ行四段活用）の未然形「乗ら」に、助動詞「る」の終止形と助動詞「べし」の連体形が接続したもの。傍線部は、入道殿の言葉であり、「乗らるべき」の主語は大納言であるところから、助動詞「る」は尊敬の意味（～なさる）、「べき」は推量の意味（～だろう）を表すと考えられる。

問2　単語の意味問題。まずは辞書的な意味をしっかり覚えること。特に古今異義語に注意する。また、一つの単語がいくつかの意味を持っている場合には、文脈などから判断する。

①「作文」は、「さくもん」と読み、「漢詩を作ること、または、その漢詩」を意味する。

②「たへたる」は、ハ行下二段活用の動詞「たふ」（耐ふ・堪ふ）の連用形「たへ」に、完了（ここでは存続）の助動詞「たり」の連体形「たる」が接続したもの。「たふ」には「こらえる、我慢する」という意味の他に、「事に応ずる能力を持つ、すぐれる」という意味がある。ここでは「その道にたへたる」とあり、「その道」とは先に記されている作文、管弦、和歌の道を指すので、「たへたる」は「それぞれの道にすぐれた能力を持っている」という意味になる。したがって正解は㈠。「堪能（たんのう）」とは、「学術や技芸にすぐれていること」という意味である。

問3　敬語の問題。敬語には、尊敬語、謙譲語、丁寧語の三種類がある。一つ一つの敬語動詞について、意味とともに敬語の種類も正確に覚えておくこと。その際、本動詞か補助動詞かによって種類の異なるものや、同じ本動詞の働きでも尊敬語と謙譲語というように二種類の意味を表すものには、特に注意が必要である。

(a)「参り」は、ラ行四段活用の動詞「参る」の連用形。「参る」には、尊敬語と謙譲語の二種類があるが、ここでは、身分の高い入道殿のもとへ「参上する」という意味を表し、謙譲語となる。

(b)「のたまはすれ」は、サ行下二段活用の動詞「のたまはす」の已然形。「のたまはす」は「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」という意味。なお、ハ行四段活用の動詞「のたまふ」もまた「言ふ」の尊敬語で、「おっしゃる」という意味だが、「のたまはす」は、「のたまふ」の未然形「のたまは」に尊敬の助動詞「す」が付いた語で、「のたまふ」より敬意が高い。

(c)「申しうけ」は、カ行下二段活用の動詞「申しうく」（申し受く）の連用形。「申し受く」は、「（許可を受けたいと）お願い申し上げる、願い出て引き受ける」という意味を表す謙譲語。そもそも、「申し受く」は動詞「申す」の連用形「申し」に動詞「受く」が付いた複合動詞であり、「申す」は「言ふ」の謙譲語である。

(d)「侍ら」は、ラ行変格活用の動詞「侍り」の未然形。ここでは本動詞として用いられているが、本動詞「侍り」には謙譲語と丁寧語の二種類がある。「いにしへ（昔）も侍らぬ」は「事」の修飾句であるので、ここでの「侍ら（侍り）」は「あります、ございます」という意味を表す丁寧語である。

問4　解釈問題。まずは、単語の意味に注意して傍線部を正確に訳出する。その上で、文脈をたどり、状況から具体的な内容を読み取る。

傍線部(3)は、動詞「あそばす」（サ行四段活用）の連用形「あそばし」に、助動詞「たり」の終止形と終助詞「な」が接続したもの。「あそばす」は「いろいろな動作をする」意の尊敬語で、一般的には「なさる」という意だが、特に、「楽器をお弾きになる」「和歌をお詠みになる」という意味で用いられることが多い。ここでは直前にある大納言の詠んだ和歌についての説明だから、「和歌をお詠みになる」という意味があてはまる。また、ここでの「たり」は完了、「な」は詠嘆の意味を表している。そこで、傍線部は「和歌をお詠みになったなあ」と直訳できる。ここでいう和歌は、大納言が詠んだ「をぐら山……」の歌を指すが、「あそばしたりな」の直前に「申しうけ給へるかひありて」とあることに着目。「申しうけ給へる」は、直訳すれば「お願い申し上げなさった」という意味で、ここでは大納言がみずから入道殿にお願い申し上げて和歌の船にお乗りになったことを指している。「かひ」とは、ここでは「（それに見合う）値打ち、価値」という意味であるから、「かひありて」とは、「それに見合うだけの価値があって」ということになる。これに「和歌をお詠みになったなあ」と続くのだから、つまり、大納言みずから和歌の船を選んだだけあって、そこで詠んだ和歌はすばらしい出来栄えだった、と言っているのである。そこで、設問の指示どおり「何をどうした」という形でまとめると、「和歌を上手にお詠みになった」、あるいは「すばらしい和歌をお詠みになった」などとなる。

問5　読解問題。傍線部を正確に現代語訳した上で、問題文全体の内容を踏まえ、それが意味するところを読み取る。

傍線部(4)は、5行目「御みづからも、のたまふなるは、……」ではじまり、7行目「……とのたまふなる。」で終わる、大納言の会話文中にある言葉である。「のたまはせしになん」は、動詞「のたまはす」の未然形「のたまはせ」に、過去の助動詞「き」の連体形「し」、格助詞「に」、強意の係助詞「なん（なむ）」が接続したもの。「心おごりせられし」は、サ変の複合動詞「心おごりす」の未然形「心おごりせ」に、自発の助動詞「らる」の連用形「られ」と、過去の助動詞「き」の連体形「し」が接続したものである。「心おごりす」は、「得意になる、おごり高ぶる」という意味を表す。したがって、この部分は、「『いづれにかと思ふ』とおっしゃったのには、我ながら得意にならずにはいられなかった」と訳すことができよう。設問は、大納言が思わず得意になった理由を尋ねているわけだが、文脈から、直前にある「いづれにかと思ふとのたまはせし」が理由説明になっているとわかる。「い

づれにかと思ふ」の箇所は、「殿の……とのたまはせし」にはさまれていることから、入道殿の言葉を引用したものとわかる。具体的には、先に記された入道殿の「かの大納言、いづれの舟にか乗らるべき」という言葉に該当する。これは、大納言がどの舟に乗るのか、想像がつかなかったために生まれた疑問である。漢詩、音楽、和歌という三つの方面にそれぞれ堪能な人を分けて乗船させ、おのおのの船で力を競わせるのが、入道殿の趣向であった。そこで、この疑問は裏を返せば、大納言はどの船に乗ることもできるということであり、つまり大納言は、漢詩、音楽、和歌のいずれにおいても優れた才能を持っているということを、入道殿が認めていることを表しているのである。したがって正解は㋐。

問6　読解問題。まずは問題文から作者の気持ちが表れている箇所に注目し、その上で、それが大納言へのほめことばになっているかどうかを吟味する。

問題文から、出来事の記述や人から伝え聞いた内容が客観的に描かれている箇所を除いた部分、すなわち作者の感想が記されているのは、本文5行目の「申しうけ給へるかひありて、あそばしたりな。」と、末尾の「ひと事のすぐるるだにあるに、ましてかくいづれの道もぬけ出で給ひけんは、いにしへも侍らぬ事なり。」の二箇所である。前者は**問4**でも見たように、大納言のことをほめてはいるものの、それは大納言が詠んだ「をぐら山」の歌の出来栄えに限られる。そこで後者の内容をみていく。まず、「だにあるに、まして」という語句に着目。副助詞「だに」が「まして」と共に使われる場合は、「〜でさえ」という類推の意味を表す。「Aだに……、ましてBは」という形であれば、「Aでさえ……なのに、ましてBは」と解釈できる。ここでは「Aだにあるに、ましてBは」の形である。この場合の「あり」は補助動詞で、この上に「Aだに……、」の「……」に該当する語句が省略されているとみる。そこで、その語句を、下に続く文脈との対比から補っていく。なお、「に」は、逆接の接続助詞。後半の「ましてかくいづれの道もぬけ出で給ひけんは、いにしへも侍らぬ事なり」は、現代語訳をすると、「ましてこのようにどの道にも抜きん出ていらっしゃったというようなことは、昔にもないことであります」となる。これをふまえれば、前半の「ひと事のすぐるるだにあるに」は、「(漢詩や音楽といった)一つの方面に優れていることでさえまれであるのに」と訳せよう。前半で、一般論として、例えば和歌という一つの方面においてでさえ、優れた能力を持っている人はめったにいないと言う。後半の「ぬけ出で」には「給ひ」と、尊敬の補助動詞「給ふ」が用いられているところから、主語は大納言である。大納言は和歌に限らず、漢詩でも音楽でもどの道においても秀でているといい、そうしたことは昔にも例がないというのだから、古今を問わず、類いまれな才能の持ち主だと大

納言をほめていることになる。しかもここでは、和歌に限定せず、漢詩や音楽も合わせて広く大納言の才能をほめているのだから、作者の大納言に対する賞賛の気持ちが、前者の箇所よりも強く表れているといえる。したがって求める正解は、後者の方である。

問7　ことわざに関する問題。問題文の話では三つの舟がポイントになっていることをヒントに、そこからことわざが思い浮かべられるだけの知識がほしい。

問題文の話にもあるように、平安時代、公卿などが宴遊の時に、漢詩・管弦・和歌の三つの船を仕立てて、各人の長所に従って分乗させたことから、漢詩・管弦・和歌の三つの才能を兼ね備えていることを「三舟の才」（さんしゅうのさい）、または「三船の才」（さんせんのさい）という。

3章

【添削課題】

出典…『韓非子』　／　二松学舎大学　00年・改

書き下し文

魏王荊王に美人を遺る。荊王甚だ之を悦ぶ。夫人鄭袖王の之を悦愛するを知るや、亦之を悦愛すること王より甚し。衣服玩好、其の欲する所を択び之を為す。王曰はく、夫人我の新人を愛するを知るや、其の之を悦愛すること、寡人より甚し。此れ孝子の親を養ふ所以、忠臣の君に事ふる所以なりと。夫人王の己を以て妬と為さざるを知るや、因りて新人に謂ひて曰はく、王は甚だ子を悦愛す。然れども子の鼻を悪む。子王に見ゆるに、常に鼻を掩はば、則ち王は長く子を幸せんと。是に於いて新人之に従ひ、王に見ゆる毎に常に鼻を掩へり。王夫人に謂ひて曰はく、新人寡人を見て、常に鼻を掩ふは何ぞやと。対へて曰はく、知らざるなりと。王強ひて之を問ふ。対へて曰はく、頃嘗て王の臭ひを聞ぐを悪むと言へりと。王怒りて曰はく、之を劓れと。夫人先んじて御者を誡めて曰はく、王適々言有らば、必ず命に従ふべしと。御者刀を揄きて美人を劓れり。

現代語訳

魏王が（楚の）荊王に美人を贈った。荊王はこの女を非常に気に入り喜んだ。夫人の鄭袖は王がこの女を寵愛しているのを知ると、自分もまた（表面上は）この女を寵愛することは王以上であった。衣類も飾りの小道具も、この女の欲しいままに選んで用意した。王が（感心して）言うには、「后は私が新しい女を愛しているのを知ると、后もこの女を愛することは私以上である。これは孝行者が親に仕える仕方であり、忠義な臣下が主君に仕える仕方である」と。夫人は王が自分が嫉妬していないと思ったと知り、そこで新しい女に言うには、「王はあなたを非常に寵愛しておられる。しかしあなたの鼻（の形）を嫌っておられる。（だから今後は）あなたは王にお目にかかるとき、いつも鼻を覆い隠せば、王はいつまでもあなたを寵愛なさるでしょう」と。こういうわけで新しい女はこの言葉に従

い、王にお目通りするたびいつも鼻を覆い隠した。（不思議に思った）王が夫人に言うは、「彼女が私に会うとき、いつも鼻を覆うのは何故だろうか」と。（夫人が）お答えして言うには、「わかりません」と。（すると）王はむりやりその理由を問いただした。（そこで夫人が）お答えして言うには、「（実はあの女は）最近ずっと王の体臭をかぐのが嫌だと言っておりました」と。王が怒って言うには、「この女を鼻削ぎの刑にせよ」と。夫人はあらかじめ御者〔＝王の身辺を警護する者〕に注意して言うには、「王が急にご命令されても、（間い直したりせず）きっとご命令どおりにせよ」と。（そのために）御者は刀を引き抜き、この美人の鼻を削ぎ落してしまった。

解答

問1　(1)＝ほっする（ほつする）　(2)＝しかれども　(3)＝ここにおいて

問2　X＝荊王　Y＝美人

問3　④

問4　⑤

問5　夫人は女を可愛がっているので、その夫人にならば女は鼻を覆う理由を話しているだろうと思ったから。〔解答例〕

問6　王がことの真相を知る前に刑を執行させたかったから。〔25字・解答例〕

問7　②

【問題】（自習）

出典…『韓非子』／二松学舎大学　93年・一部改

書き下し文

燕王微巧を好む。衛人曰く、能く棘刺の端を以て母猴を爲ると。燕王之を說び、之を養ふに五乘の奉を以てす。王曰く、吾試みに客の棘刺の母猴を爲るを觀んと。客曰く、人主之を觀んと欲せば、必ず半歲宮に入らず、酒を飲み肉を食はず、雨霽れ日出づるとき之を晏陰の閒に視て、棘刺の母猴乃ち見るべきなりと。燕王因りて衛人を養ふも、其の母猴を觀ること能はず。鄭に臺下の冶なる者有り、燕王に謂ひて曰く、臣は削を爲る者なり。諸々の微物も必ず削を以て之を削り、而して削る所必ず削よりも大なり。今棘刺の端は、削鋒を容れざれば、以て棘刺の端を治め難からん。王試みに客の削を觀よ。能くすると能くせざると知るべきなりと。王曰く、善しと。衛人に謂ひて曰く、客棘刺の母猴を爲るに、何を以て之を治むるやと。曰く、削を以てすと。王曰く、吾之を觀見せんと欲すと。客曰く、臣請ふ舍に之きて之を取らんと。因りて逃る。

現代語訳

燕王は微細な細工物が好きであった。（ある）衛の国の人が言うには、「（私は）バラの刺の先に猿を彫ることができます」と。燕王はこれを聞いて喜び、兵車五台分の俸給を与え食客とした。（しばらくして）王が言うには、「私は試しに貴方がバラの刺に猿を彫っているところを見てみたい」と。客が言うには、「君主がこの様子を見たいとお思いならば、きっと半年の間大奥に入らず（に女色を絶ち）、酒を飲んだり肉を食べたりもせず、雨あがりに陽が差したときこれ〔＝バラの刺〕を日なたと日かげの間から御覧になれば、（そのときに）バラの刺の猿を見ることができます」と。燕王はその（無理難題の）ため衛の人を養っていても、刺の先の猿は見ることができなかった。（あるとき）鄭の国の台下に鍛冶屋がいて、燕王に向かって言うには、「私は鑿を作っている者です。微細なものは皆必ず鑿で削って造りますが、削られるものは必ず（削る）鑿より大きい（はずです）。しかし今、バラの刺の先は（微細すぎて）、鑿の刃が入りませんので（鑿では）バラの刺の先を細工できないはずです。王様、試しに客人の鑿を御覧なされよ。（バラの刺の先の彫刻が）可能か否か分かるでしょう」と。王が言うには、「なるほど」と。（そして）衛の人に向かって言うには、「貴方はバラの刺の猿を彫る

のに、何を使って作業するのか」と。（客が答えて）言うには、「鑿を使います」と。（そこで）王が言うには、「私にその鑿を見せて欲しい」と。客が言うには、「どうか私に宿舎に行ってそれ（鑿）を取って来させてください」と。（そして男は）そのまま逃げてしまった。

解答

問1 ①＝ず　②＝ざ（れば）・ず（んば）　③＝ざ（る）　**問2** (オ)

問3 母猴を見るために厳しい条件をつけたから。〔20字・解答例〕

問4 (エ)　**問5** 吾欲二観一見之一　**問6** 衛人　／　客

問7 (ウ)

解説

問1 語句の読みの設問。

すべて助動詞「ず」に読む「不」の読みだが、設問の「必要が有るものには、文脈に即した送り仮名を括弧して記せ」という条件に注意する。「ず」は古文と同じ未然形接続の打消の助動詞だが、古文とは活用が異なり、ナ行の連体形「ぬ」・已然形「ね」は用いずに補助活用「ざる」・「ざれ」を用いる。また、順接仮定条件を表す場合、「ざらば」「ざれば」でも同じ意味を表せるが、多くは古文の順接仮定条件である「ず＋は」が強まった形「ずんば」を用いる。これは同じく否定の「無くんば」「に非ずんば」、形容詞型活用の助動詞である「べくんば」でも同様であり、意味は全て「……としたら」という順接仮定条件を表しているので合わせて記憶しておきたい。

①は「半歳宮に入ら〔不〕、酒を飲み肉を食はず、」という「連用形＋、…」で下に続く「連用形中止法」の文脈であるから「不」自体を連用形「ず」に読んで送り仮名は不要である。②は、文頭に「今…、…難からん」という訓読から分かるように、先に述べ

た順接仮定条件の文脈であるので、「ず（んば）」を答える。最後に③は、「能くすると／能くせ〔不〕と」という「與（与）」を用いた対句的並列の言い方であるから、前半「能くする」に合わせて連体形「ざ（る）」を答える。

問2　書き下し文の設問。問題冒頭にあるように「返り点、送り仮名」は省かれているので、特別な句法や語法のある起点となる文字を見抜いて、漢語の語順で訓読する。この場合、「以」が起点となる文字で、「以レ A ヲ B ス」の語順で用いて「A（自明の場合省略される）を用いてBする」の意味で用いる、英語の前置詞「by」や「with」に似た語。ここではさらに「之」という指示語を用いて前後を倒置して強調している。元の語順に戻すと「以二五乗之奉一養レ之」である。しかし、「乗＝車の単位」、「奉＝俸給」というテキスト下段の注も踏まえて選択肢を見ると、書き下し文を直訳して、ここでの「王が喜んで衛人を厚遇した」という文脈にとれるのは最初から(ア)と(オ)しかない。迷うのは訳してみればほぼ同じ意味となる(ア)だが、「以レ A ヲ B ス」の語順に合致した(オ)が正解。

問3　理由説明の設問。「燕王因りて衛人を養ふも、其の母猴を觀ること能はず」と「因りて（＝そのために）」という表現があるように、傍線部の直前の、衛人の付けた条件がその理由である。文字数が二十字以内ととても少ないので要点を要領よくまとめるのがポイント。一国の王に対して「半年間婦人に接せず、飲酒肉食も禁止で、かつ雨上がりの陰と陽の狭間から見よ……」というのは要するに実現不可能に近い無理難題である。個別の条件を挙げるゆとりはないので「とてもできない条件」とまとめて「……から。」の形にまとめる。

問4　通釈の設問。まず書き下し文を吟味して正確に直訳してみることが基本である。ここは置字「於」が形容語「大ナリ」の直後に用いられて「A、C於B」の語順で「Aは、BよりもCなり」という「比較」を表している。ここから「削る所必ず削よりも大なり」と書き下せる。「比較」の解釈をしている選択肢のうち、事実関係（＝鑿より必ず素材が大きい）を正しく述べた(エ)「削られるものは、必ずのみより大きい」が正解。なお、英語の関係代名詞に近い用法を持つ「所…」も解釈に注意の要る語である。「所感」「所存」「所得」「所有」「所詮」…と、現代語にも多く用いられ「…するところのもの、その相手」という意味の熟語を構成している。この場合「削る所」とは「鑿で削る相手の素材＝削られるもの」の意味になる。

問5　訓点の設問。訓読に従ってルール通りに付けていけばよいが、この場合は「之を／観見す」というように、「観見す」という熟語の他動詞に変える点がポイントである。「観二見之一」と規則通りに付けたつもりでもこれだと「見す之を観」という語順になってしまうので、予めまたは読んでみて、「観二見一」と二字を一語化しておく必要がある。また、「欲す」に返る場合、「見」から二字以上返る形になるので「レ」ではなく「三」を振ることにも注意が要る。

問6　主語主体抜き出しの設問。「逃亡」するであろう人物は「バラの刺の先に猿を彫ることができる」と嘘をついて養われていた男であるから、この男を指す語を二種類本文から探せばよい。正解は冒頭にある「衞人」と「客」。「…人」という表現は人種も異なるニュアンスを持つ「…じん」ではなく、「…ひと」と読んで、出身国名を示した表現。中国は広く風俗習慣も大きく異なるので、物語でもたいていは出身国名に触れるのである。もう一つの「客」も「かく」と読んで今日の単なる「客人」ではなく「客分としてかかえられている私的な家来。特に、中国の戦国時代、特別な技術・才能によってめしかかえられた人」である「食客」を指す。

問7　趣旨判別の設問。ここは本文の「冶」の言葉を元に選択肢が構成されている。「王試みに客の削を観よ。能くすると能くせざると知るべきなり」とあり、それを受けて王が「吾之を観見せんと欲す」と述べていることから、正解は(ウ)「棘刺の母猴ものみで彫るのだから、そののみが有るか無いかで彫れるか彫れないかが分かる」である。

L3T/L3TK/L3TF
難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製